# 持続可能社会を奥能登･珠洲のキリコ祭りで学び体験するツーリズムの企画と実施

～課題継続～

指導教員①：金沢大学地域連携推進センター　客員教授　宇野文夫
参加学生　：門松怜史・藤澤慶・田畑奈津子・石崎正樹・岩井麻衣子・金井美咲・佐々木佳・近藤真未
内田　愛・丹羽りさ
指導教員②：金沢美術工芸大学造形芸術総合研究所長　教　授　川本敦久
准教授　佐藤俊介
参加学生　：藤井麻理・角井要平・高　陽子・佐藤佳奈・山田紗英子・青木祐子

## １．調査研究成果要約

キリコ祭りを従来の見物を中心とした観光ツアーではなく，学ぶこと，すなわちスタディ・ツアーとして成立させるための調査研究として，平成２１年度に引き続き，今年度も金沢大学と金沢美術工芸大学の連携で，キリコ祭りをテーマとしたツーリズムの創出と教材ビデオの制作（金沢大学）と珠洲市寺家地区のキリコ絵の復元（金沢美大）に取り組み，完成させることができた。

## ２．調査研究の目的

平成２１年度に引き続き２２年度も，珠洲市からの２件の課題提案（平成２１年度課題番号２８と２９）に取り組み，「作品」を完成させることを目的とした。

【平成２１年度の実施概要】

金沢大学は奥能登のキリコ祭りを従来の見物を中心とした観光ツアーではなく，学ぶことを目的としたスタディ・ツアーとして成立させる調査研究として，3泊4日のツアー（平成２１年9月１４日～１７日）を日本旅行関連会社とタイアップして「金沢大学シニア短期留学」として商品化，全国から５０代以上の6人（東京，石川，京都，大阪，奈良，福岡）の参加を得て実施した。また，ツアーの模様と金沢美大によるキリコ絵の作成過程をＶＴＲ収録し，学生が作成した番組（30分）を能越ケーブルネット珠洲エリアで放送した（平成２２年 2 月）。また，金沢美大は珠洲市寺家地区のキリコ絵を地元と図案協議（平成２１年6月，7月），地元住民への図案のプレゼンテーション（同年9月），図柄の修正協議（同１０月，１２月），キリコ絵の作成（平成２２年3月下旬から4月上旬）のプロセスを経て，学生延べ４０人，２６種類の絵の具によって描かれたキリコ絵（布地）を地元に引き渡した（同年4月）。制作に至るまでのコンセンサスに時間がかかったのは，地元の伝説をもとに獅子に乗って海を渡る観音絵の伝統的な構図を踏襲しながらも，時代を反映した斬新さを図案にどう込めていくか，その論議を住民側と美大側が真摯に積み上げていったからである。地元側のキリコ絵に対する熱い思い，美大側の創作へこだわり，時に並行性をたどりながらも両者が接点を模索する丁々発止のやり取りは時にドラマでさえあった。

【平成２２年度の取り組み目標】

こうして時間をかけたがゆえに作品の完成度は高まった。作業は引き渡しをもって完了したわけではなく，平成２２年7月に寺家の現地で，キリコの胴体部分に絵（布）を取り付けるのが最終工程となる。また，金沢大学生チームが取り組んだＶＴＲ制作も最終的なキリコ絵の取り付け，そして9月１１日に予定された寺家地区のキリコ祭りでのお披露目のハイライトまで撮影を続けた。

## ３．調査研究の内容

本調査研究は，金沢大学が代表機関となり，金沢美術工芸大学（以下，金沢美大）と協働で実施した。

その内容は以下の４点であった。

１）平成２１年度に引き続き，キリコ祭りをテーマとしたスタディ・ツアーを実施（金沢大学）

スタディ･ツアー「シニア短期留学」は，寺家のキリコ祭り参加をメインに，能登と金沢の地域資源（食，自然，歴史）をサブに日本旅行関連会社とタイアップして商品化し，平成 21 年度に引き続き実施した。開催日は 9 月 10 日から 16 日の 7 日間。珠洲市寺家地区のキリコ祭りに合わせ企画した。今回全国から 9 人の参加があり，うち 3 人がリピーターだった。実施内容は以下の通り。

4日目（13日）

## 能登学舎でツバキを記念植樹

出村龍彦氏（里山マイスター技術補佐員）の指導で、能登学舎にツバキを2本植えました。能登学舎の農園、珠洲焼ギャラリーなどに立ち寄り金沢へ移動。

マイスターの野菜はうまい

珠洲焼の魅力を学ぶ

5日目（14日）

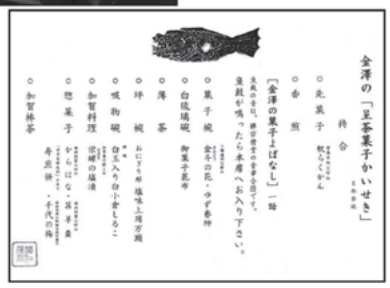
**能登 ⇒ 金沢**

## 兼六園、その魅力と名園を持続させる知恵

霞が池の内橋亭で、前金沢城・兼六園管理事務所長の山口勝昭氏から兼六園の歴史や名園を守るための知恵を学びました。引き続き、金沢の料亭「つば甚」で菓子懐石をいただきながら、諸江吉太郎氏の解説に耳を傾けました。

唐崎松の「世継ぎ木」

## 料亭で味わう金沢の菓子文化



金澤の「呈茶菓子かいせき」

待合

○先菓子　紙らくがん

○香　煎

（「金澤の菓子とばなし」一筆

玄関のそば、御茶屋さのまを出て、

豊郷が咲いたら来年へお入り下さい。

○菓子　椀　金平の花・ゆず巻柿

○白扇墨碗　御菓子昆布

○薄　茶

○坪　椀　おにぎり形　塩味土瓶ガ鯛

ゆず入り白小豆しるこ

○吸物碗　沢蟹の塩漬

○加賀料理

○懐　菓　子　からはな・茶手巻

寄菓子・千代の海

○加賀棒茶

## 金沢の街の仕組みを知る

6日目（15日）

街づくりプランナーの吉田洋氏から金沢の旧町名の復活の話を。ボランティア・ガイドの西川正一氏には東山界隈を案内してもらいました。

最終日（16日）

## 学びの1週間　晴れて修了式

地域連携推進センター副センター長の浅野秀重教授から修了書が手渡されました。学ぶことは輝くこと、学びはエンドレス。

２）キリコ絵の制作にあたり最終工程となる取り付けの実施（金沢美大）

金沢美大が制作したキリコ絵（布地）の制作は足掛け２年に渡り，平成２２年６月の布張りをもって完成した。布張りの作業には，制作に携わった金沢美大の教員と院生が立ち会った。

## 足掛け2年に渡った「キリコ絵」の制作

### 珠洲・寺家のキリコ絵が立ち上がるまでの経緯

2009年度

【4月】 珠洲市三崎町寺家でキリコ祭りを運営する上野塩津組（当時・小泊宏紀氏）より、「キリコ絵（図柄・観音絵）が作成されて10年余りたつので、新調したい。ついては、美大生に描いてもらえないか」との要望が同市在住する金沢大学「能登里山マイスター」養成プログラムの教員スタッフに持ち込まれた。

【6月15日】 寺家の小泊氏ら担当者と珠洲市、金沢大学地域連携推進センターのスタッフが金沢美大を訪ね、協力を要請した。

【7月21日】 金沢美大の川本敦久教授、佐藤俊介准教授らが寺家を訪れ、キリコ絵を下見。

【8月4日】 金沢美大で、キリコ絵にまつわる言い伝えについて、地元からの説明があった。

【9月15日】 金沢美大が素案を地元に提示し、要望や意見を聞く＝写真＝。シニア短期留学でその様子を立会い。

【12月24日】 図案に関する地元と美大で話し合いがまとまる。

【3月下旬から4月上旬】 金沢美大の修士課程の院生ら6人がキリコ絵を制作＝写真＝。

【4月14日】 金沢美大で、久世建二学長から地元にキリコ絵の引渡し＝写真＝。

2010年度

【6月20日】 金沢美大の教員、院生が、キリコ絵をキリコ胴体に張りつける作業に立ち会いながら、最後の仕上げ作業＝写真＝。

【7月4日】 クレーンを使ってのキリコ胴体の組み立て作業。あとは、9月11日の本番を待つ＝写真＝。

３）能登の祭りとキリコ絵をテーマにしたワークショップを開催（金沢美大，金沢大学）

９月１１日の珠洲市寺家地区の祭礼の当日，金沢大学能登学舎で「能登の祭りとキリコ絵」をテーマに金沢大学と金沢美大で共同のワークショップを開催した。両校の学生と院生，ツアー参加者，地元の方々４０人余りが参加した。ワークショップ前半では，キリコ祭りが能登の人々とどのように関わりあっているのか，人と祭りの文化史について金沢大学地域連携推進センターの堀内美緒研究員が「キリコ祭りから考察する持続可能な社会」と題して発表した。その後，キリコ絵の制作を指導した金沢美大の佐藤俊介准教授が今回の寺家のキリコ絵について話した。

＜堀内研究員の発表要旨＞

江戸時代に町民の経済基盤が強くなり，北前船で財を成した豪商が出てきて，キリコは大きく，そして華麗になったと推測される。近隣の町村のキリコが大きくなると，それに負けまいとさらに大きなキリコを造るようになり，競い合うようにして大型化したともいわれている。明治，大正，昭和時代に電線が張り巡らされ，町では小さくなったが，村ではさらに大型化した。キリコは能登の風土に根づいたものだ。アテ（能登ヒバ）は巨大なキリコを支える４本柱に使われている。輪島塗の技術を使ってキリコに漆が装飾されたりしている。能登は浄土真宗が盛んで，浄土真宗の仏壇を作る技術や漆を使う技術がキリコの加飾に応用され，豪華さを競うようになったとも考えられる。

＜佐藤准教授の発言要旨＞

制作にあたっては寺家の地元の方々に絵のモチーフとなる言い伝えや逸話を聞くことから始めた。女神が獅子に乗ってやってきて，帰るときにたまたまイルカがいたのでそれに乗って帰ったので，獅子がずっと女神を待っていて，そのまま年月がたって獅子岩になったという言い伝えがある。そこで，平面的なもの以外に少し映像的な視点でとらえたものや，日本的ではなく西洋的な図でとらえたものなどを何パターンかを地元担当の方々にプレゼンテーションし，さらに幾つかに絞ったものを，寺家に出向いて地元のみなさんの意見をうかがった。しかし，地元の方々にとってはこれまで何十年と目になじんだ画風と随分違っていて，そのギャップでかなり抵抗があった。そこからさらに地元担当の方々と話し合いを進め，地元の意向を絵に反映した。女神は当初，指を指していたが，それを降ろしてもう少し優しい表情にして，全体的に大きくした。なるべく暖かい色を盛り込むようにした。

ワークショップの後半では，寺家地区の方々といっしょに，制作した美大の院生，金沢大学の学生，ツアー参加者が実際にキリコを曳いて祭りを体感した。祭りでは，学生たちが祭り装束のドテラや法被を地元の方たちに着せてもらうなど，キリコ交流が繰り広げられた。

４）スタディ・ツアーとキリコ絵の制作をテーマとしたＶＴＲの作成（金沢大学）

足掛け２年にわたる地域課題ゼミナールの総集編のビデオを完成させる。ビデオは30分程度に編集し，平成２３年３月ごろに能越ケーブルネット珠洲エリアで放送する予定。また，ＣＳ放送「朝

日ニュースター」の旅番組で放送してもらうよう現在交渉を進めている。

４．調査研究の成果

スタディ・ツアーでは，シニア世代の９人の参加を得た（平成 21 年度は 6 人）。うち 3 人がリピーターだった。ツアー後のヒアリング調査では，参加者からはおおむね好評を得たが，連続参加した古堅郁子さん（生駒市・７０歳）は「市販の観光ガイドマップやツアーで得られない，土地の人々の息づかいまでもが聞こえてくるツアーでした。キリコ祭りを通じて，土地の人々との語らいも新鮮でした。本来の旅の原点を気づかせてくれるツアーではないでしょうか。また能登に来たい」と話した。同じく連続参加の杉山太郎氏（豊中市・７４歳）はキリコ絵の制作について，「キリコ絵は昔ながらの絵を大事にしていて，今回現代風に変わった。新しい絵に対して地元では違和感を持つ人がいたのも事実。しかし，キリコ祭りを将来にわたって続けていくためには，その時代に応じた新しい感性や技術を取り入れていく必要があると地元の多くの人たちが思っている。キリコが進化するというはある意味で時代に対応する地域の力だと実感しました。歴史の一場面に遭遇したような思いです」と感想を述べた。

５．調査研究に基づく提言

体験豊富で，いろいろなことを見聞きして，洞察力も深いシニア世代を満足させるツーリズムの開発，これが目的だった。そのコンテンツの中心に奥能登のキリコ祭りを据えて，文化と歴史，そして山海の幸の味わいを感じ取ってもらえる旅行企画として工夫した。スタディ・ツアーに連続参加し，自ら旅行業者でもある釼菱英明氏（福岡市・61歳）からプロのアドバイスをもらい，以下提言したい。

【能登のＰＲ】旅行商品としてキリコ祭りをＰＲするには，よほど知名度を上げないと集客は難しいが，「能登半島まつりの旅」のように，本来能登が持っているブランド力を全面に立てることで，それは可能ではないか。

【旅行形態】　能登半島は路線バスの利用となるので，地域を歩く着地型のコースを中心とした旅行商品を検討したほうがよい。また，個々のメニューを訪問者に楽しんでもらう案内人「ランドオペレーター」機能を観光協会に置くことも一案。能登体験ガイドが仕事として成立するようにツアー人材を養成すべきだ。具体的には，能登の歴史や文化を深く知る，Ｔ字型の総合的な人材となる。

【ターゲット】1960 年代の能登半島の観光ブームのときに青春を過ごした年代がいまのシニア世代であり，当時年間 100 万人を超える人が能登を訪れた。能登は「記憶の潜在」として知名度は高く，その記憶を掘り起こせば，マーケットの開拓ができるのではないか。また，外国人観光客に日本の原風景として里山や里海と人の生業（塩作り，炭焼き，海女漁など）を紹介してはどうか。能登のこうした生業は農耕儀礼アエノコトのように世界文化遺産に登録されてもよいくらいの価値がある。

６．調査研究の自己評価

本調査では，キリコ祭りをテーマにスタディ・ツアーを 2 度実施，キリコ絵の制作を 2 年がかりで行うという欲張った内容となった。ツアー代金は 7 日間１０万９０００円にもかかわらず，3 人のリピート参加があった。報告ビデオ（３０分）も完成度が高いものになった。ビデオは，地元の祭りに対するこだわりの強さ，その祭りへの愛着が能登の人々の精神的な支柱となっていることが見て取れるドキュメンタリーとなっていると自負している。今回の調査研究をいろいろな場で発表していきたい。